

短期大学における教育を充実させるために

教授 酒巻 和子（音楽学）

はじめに

修業年限を2年とする短期大学では、入学した年が初年次、2年生がすなわち卒業年次となる。この間に学生が身につけるべき力について、私たち短期大学の教員は共同研究会で議論を重ねてきた。10コースそれぞれのカリキュラムを見直しながら、授業内容の検討、さらにはカリキュラムそのものの検討を行ったのである。近年、大学及び短期大学には、教養教育の重視、学士力の養成などさまざまな表現によって大きな責任と教育力が求められてきている。そして平成23年度からは就業力を養うべく「キャリア教育」をカリキュラムに取り入れることが提言されている。これは理科系・文化系を問わず、また芸術を専門とする短期大学にも例外なく要請されていることなのである。

本学の人材養成目的は「実践的な能力を備えた教養豊かな人材を養成するために専門教育を行う」と定められており、まさにこのような社会的要請にかなったものである。この目的を達成するために、実技科目と学科目の担当教員は、互いに連携して学生に向き合わなければならない。学科目を担当するひとりとして、個人研究のテーマは、既存の科目をより充実させる取り組みとした。

1. 既存の科目の充実

共同研究を始めるにあたり、まず本学の現状を確認し、「短期大学における実技教育のために学科目の果たす役割について」として考察した。現行のカリキュラムにおいて、専門科目の内容はそれぞれ実技教育のために非常に役立つものであることを改めて認識することができた。しかし一方で、専門と密接に関連していても、学科目に対する学生の学習意欲が必ずしも充分でないことや、入学までの力に差があること、授業外学習の習慣ができていないことなど、問題点も確認した。本来の目標を実現するために、学科目を担当する者として授業方法の改善と工夫に取り組んだ。

1) 「和声学」

音楽理論に関する科目は、さまざまなコースの学生にとって基礎的な知識を提供する。目標とするのは、楽曲分析や演奏解釈に結びつくような応用力を、専門の実践に結びつけて養うことである。

学生たちが演奏する作品の圧倒的多数が調性音楽の枠内にあることを考えると、多くのコースで必修に置かれた「和声学」の重要性は、いうまでもない。和音の響き、調性における和音の機能、和声進行の演奏効果等については、実践で身につく感覚でもある。また作曲家の意図するところを正しく把握することこそ、演奏者に課せられたことではないだ

ろうか。「和声学①」の授業では常に個別の指導を心がけた。理解度と満足度が明確に関連するからである。また、正解として書かれた和声進行の楽譜をピアノで演奏して聴かせると、次第に「より音楽的に」という意欲が高まってくるようであった。日頃、楽譜を書く習慣がなかった学生も、音符を頭の中で鳴らしてみる、という重要な能力も身に付けられるはずである。新たな試みとして、ポピュラー音楽理論の要素も取り入れ、コードネームや英語の理論用語も紹介した。キャリア教育とも結びつくことと、クラシック音楽とポピュラー音楽の深い関係が、身近に感じられたようであった。

「和声学②」では、簡単な分析を取り入れた。数種類の七の和音や九の和音、そして借用和音まで範囲に入るようになると、響きの範囲が複雑に広がり、興味を抱いてくれたように思う。

2)「西洋音楽史」

演奏を専門とする学生にとって、「西洋音楽史」は、時代様式の特徴を実感すること、演奏作品のレパートリーを拡大すること、楽曲形式を表す言葉の定義と変遷を正しく理解すること、などに欠かせない重要な科目である。入学前の多様な音楽体験や楽譜を読む力に応じて、基本的な音楽用語や背景としての西洋文化の一般的概念についても、わかりやすく解説することが求められている。基礎知識を補うためにも「文化史」を履修することを勧めている。なお、ジャンル史としては「オペラ史」、「鍵盤音楽史」、「器楽史」、さらに「バレエ史」が用意されており、カリキュラムとしては学生の専攻と多様なニーズ、さらに意欲に応えられるようになっている。

「西洋音楽史」のクラス分けは、コースを考慮して指定している。昨年度と今年度は、主として弦管打楽器コースの学生のクラスを担当した。この授業で学生の理解を高めるために工夫したのは以下のようなことである。

○ プリント資料の作成

短期大学では共通の教科書、教材を用いている。そのほかに担当クラスでは毎回プリントを配付している。授業ごとのテーマを明記した上で、「今日の人名」「今日の用語」「今日の譜例」等を記載している。本来、大学生であれば自分でノートを整理するべきなのはいくまでもない。しかし、現実には教科書の当該箇所を見つけられなかったり、例示された楽譜に音楽史的観点からどのような意味があるのか十分に理解できない学生もいる。「教科書参照ページ」までも加えたりしている。ただし部分的に空欄にして、学生が書き込むようにしている。結果的にこのプリントを蓄積して復習することが、学生たちには授業外学習として役立ったようだ。

○ 練習問題の作成

「西洋音楽史」の問題集などというものは一般的には市販されていないものである。定期的にさまざまなタイプの問題を自由課題として配付した。学生には意欲が見られ、ほぼ全員が提出した。

○ 重要な作曲家・作品、事項の一覧

他大学においても「音大生なら聞いておきたい 100 曲」などという一覧表が作成されているのを目にしたことがある。それだけ最近の音大生には入学前の音楽体験が乏しいということであろう。短期大学の共通プリントとして、担当者間で協議し、前期・後

期それぞれに類似の一覧表を作成して配付した。重要な音楽用語と作曲家・作品の表も、自分で調べながら完成する様式にした。

○ 音楽を「聴く」授業外学習

図書館で検索して CD や DVD 等を視聴することを条件にして、夏休みの課題を与えた。提出されたレポートには、学生の専攻実技に直結した作品ばかりでなく、他の音楽ジャンルの知識も深めようという意欲のうかがえるものが見られた。

2. 科目の新設と改訂

1) 新設科目

短期大学では、平成 23 年度より、【表 1】に示したとおり、4 科目を新設した。

【表 1】平成 23 年度 新設科目

科目名	開講年次	開講学期・単位	対象コース	必修選択	備考
ピアノ演奏研究①	1 年	通年・2 単位	ピアノコース	必修	短大のみ開講
ピアノ演奏研究②	2 年	通年・2 単位	ピアノコース	必修	短大のみ開講
音楽人基礎①	1 年	通年・2 単位	全コース	必修	学部必修
音楽人基礎②	2 年	通年・2 単位	全コース	選択	学部必修

「ピアノ演奏研究①・②」は必修とした。これまで他のコースより必修科目の少なかったピアノコースにとって特色ある科目になるはずである。詳細については『浅井洋子・森直紀；少人数のゼミ形式による音楽教育』（本書 1～12 ページ）に記載されている。

「音楽人基礎①・②」は、キャリア教育の一環として就業力獲得を目指して併設大学と合同で開講されるものである。短期大学では①のみ必修、②は選択とした。4 年制大学の 2 年目と短期大学の 2 年次では意味が異なることへの配慮である。共同研究会で検討された詳細については『鈴木二美枝・石綿絵美；昭和音楽大学短期大学部における実践的キャリア教育』（本書 19～23 ページ）に記載されている。

2) 一般教養科目の必修化

「総合教養」は、教養教育検討会での検討結果、平成 21 年度に学部・短大合同で選択科目として新規開講された科目である。教養教育科目として、あるいは学士力を養成するために役立つ一般教養科目として有効であるとみなされ、必修に変更した。平成 22 年度のシラバスによると、「言語の表現方法を学びながら自己と社会を見つめ、生き方を考える力を養う。新聞記事を主な教材として、読む、書く、話す、の練習を繰り返す実践的な学習活動である。特に、小論文の形式を学んで論理的な表現力を身につけることを目指す。国語力とリテラシー、読むことの奥深さと想像力、新聞記事、批判的読み方、論説文、手紙文、小論文、レポート、話し合いをして人間形成を図る」とある。

【表 2】平成 23 年度 必修に変更した科目

科目名	開講 年次	開講学期・単位	H22 年度 (現行)	H23 年度 (改訂)	備考
「総合教養」	1 年	半期・2 単位 (前期・後期)	短大全コース 選択	短大全コース 必修	学部では選択

3) 専門教養科目の充実

音楽芸術コースの必修科目「音楽芸術研究Ⅱ」は、音楽を幅広く学ぶというコースの特色を反映させ、さまざまなジャンルの音楽作品を広く体験し学ぶために開設された科目である。授業では重要な作曲家・作品を取りあげ、芸術音楽の鑑賞を通して、より豊かな音楽的教養を身につけることを目的としている。なるべく感性豊かな年齢のうちに聴いてもらうべき、と独断で選んだ作品を中心としている。内容的には「西洋音楽史」と関連する部分も多いが、より教養的な側面が強調されるものである。平成 21、22 年度には、音楽芸術コースに限定された少人数クラスであることを利点として、学生の発表の機会を取り入れた双方向的な授業方法も試みた。「好きな音楽のよさを伝える」ことをテーマとして、プレゼンテーションとディスカッションの機会を作ったのである。その結果、この科目を通じていわゆる「学士力」として一般的に示される「知識、技能、態度、創造的思考力」の 4 分野の力を獲得できる可能性が認められた。その結果、この科目を「作曲家・作品研究」と名称変更して、他のコースにも選択科目として開放することにしたのである。

【表 3】平成 23 年度 履修コースを拡大した科目

科目名	開講 年次	開講学期・単位	H22 年度 (現行)	H23 年度 (改訂)	備考
「作曲家・作品研究」	1 年	通年・2 単位	「音楽芸術研究Ⅱ」 短大音楽芸術コース 必修	科目名変更 音楽芸術コース必修 短大他コース選択	短大のみ開講

3. 学生が達成できたと思うこと

平成 21 年度および 22 年度、「音楽芸術研究Ⅱ」の最終授業時に、全学実施の授業評価アンケートとは別に、学生の声を聞いた。「この科目が自分の実技向上のためにどのように役立ったと思いますか」という平成 21 年度の問いに対する回答は、『中間報告書』にほぼ原文のまま記載した。平成 22 年度には「入学する前と比べて、身に着いたと思えることはどのようなことですか」と尋ねた。学生が達成した、身につけることができたと自覚できた力は、まさに短期大学生が身につけることを求められている能力である、ということがわかった。

1) 知識

学生たちは基本的にクラシックの音楽作品に関心があり、比較的豊富な知識も備えてい

る。知っている曲を増やすこと、あるいは吹奏楽用編曲の原曲を知ること、断片だけ聴いたことがある作品の全体像を知ることが喜びである。

学生の声には、「授業で扱う授業で初めて体験した作品が気に入ると、その作曲家の他の作品をもっと聴いてみたい、CD を買おうと思う、作曲家に興味を抱くことができた、もう 1 度ひとりで聴いてみたい、自分の世界も広がり、とても勉強になった、演奏する前に、この授業で学んだ姿勢を生かして、作品の理解を深めたい、などがあった。

2) 汎用的技能

○ 日本語で表現する力

日常的に授業の感想を書いたり、少し長い文章を書いたり、少人数の利点を生かして作文力を養っている。初めは何を書いたらよいか身構えてしまう学生も、自由に気軽に書いて回数を重ねるうちに慣れてくる。後期になる頃にはしっかりした文章になっていくのがわかった。

○ コミュニケーション能力

作曲家や作品を紹介したり、解説したりしながら、講義形式に終始せずなるべく双方向的な授業をこころがけた。西洋音楽史や西洋文化に関する専門用語ばかりでなく、人名・地名や一般的な日本語の表現そのものでも学生にとってわかりにくいことがある。この時に、恥ずかしがらず自由に質問できる雰囲気を作ることが大切だと思う。

○ 情報活用力

授業内での質問に対して、その場で解答してしまうのではなく、自分で調べる方法を教えることも重要である。図書館で検索して、文献・楽譜・視聴覚資料などを入手したり、インターネットなどの多様な情報を適切に利用したりする力も養うべきである。入学直後に実施している情報リテラシーを具体的に実践する機会を作ろうと、図書館を利用することを条件として作成するレポート課題を与えるようにしている。学生も、授業中に扱われた作品を図書館で借りるなど、積極的になってきた。

○ 表現力

昨年度より、毎週ひとり約 15 分の枠内で、学生が自分の選んだ作品を紹介する機会を設けた。受け身で聴くばかりでなく、聴きたいもの、友人に聴かせたいものを皆で鑑賞することで、主体性が現れる。簡単な原稿を用意することも、プレゼンテーション力の向上に役立っているはずです。ミュージカルの DVD のごく一部や、クラシック作品の編曲、ポップス系のものもあり、学生が日頃どのような音楽を聴いているのか、どのようにして CD を買っているのか、などを知ることができた。

学生にとっても、「皆で発表し合い、互いに観想を述べ合うこともとてもためになった」のように、楽しい時間となったようだ。

3) 生涯学習力

「音楽は一生勉強」といわれるように、音楽を志す者であれば、卒業という区切りにかかわらず、音楽に対する関心は深められであろう。ここでは学習意欲の変化としてとらえてみた。「ピアノや器楽の練習にモチベーションが上がった、自分自身で新しい発見ができたと思う、自分の世界も広がり、とても勉強になった」などの声があった。

4) 創造的思考力、総合的学習経験

これは達成することが最も困難と思われる力である。しかし基本的に音楽が好き、という共通した思いから「この授業で学んだことを演奏にも取り入れて表現力を深めていこうと思う」という感想が複数あった。

結び

短期大学の教育を充実させるためには、学生にとって特に1年目の学習をしっかり身につけることが重要であると思う。今回検討した科目はいずれも、入学と同時に興味深く楽しく学び始め、意欲を継続させることが、無理なく学習の成果をあげることにつながるものである。平成23年度からのカリキュラム改訂のひとつを担当する者として、その目的を忘れずに今後の検証を怠らないようにしたい。

これまで「音楽芸術研究Ⅱ」で取り組んだことは、専門分野に密接に関連づけられる教養科目として一定の可能性が認められた。とはいえ「作曲家・作品研究」として対象コースを拡大し、より多様な学生を対象とした場合に新たな課題が生まれることも予想される。今後も常に学生一人ひとりに目を向け、授業内容の改善と課題の解決に向けて努力していこうと考えている。